



▲息を合わせ、石を割り出します



現在の軟石採石場
と採石の様子



▲垂直に切り込みを入れます



▲手作業で切り出しをしていた
ころの道具



(右中央上部の白い岩

約三万二千年前、現在の支笏湖周辺で、激しい火山活動が起こり、大規模な火砕流が石狩平野の中・南部まで押し寄せ堆積しました。この堆積物は高温と圧力のため溶けて押し固められ、その結果できた溶結凝灰岩が札幌軟石で、支笏噴火溶結凝灰岩と呼ばれます。

この軟石が発見されたのは、今から百三十年以上も昔のことです。明治二年、開拓使が札幌本府づくりを開始し、アメリカから招へいた開拓使顧問ケプロンが、本府建設にあたり石材を使用した洋風化建築を提言しました。開拓使も防火性のある建物の建築が必要と考え、その方針を決定。こうして建築資材となる石材採しが始まり、明治五年、地質・鉱山技師アンチセルが石山一帯の地質調査で軟石を発見しました。

軟石は名前の通り、ほかの石に比べ軟らかいため加工がやすく、建物の土台や壁などに利用できることが分かり、明治七ころから採石が始まりました。断熱性に優れた建築資材として用いられ、明治八年で採石量は約二万個、最盛期（大正～昭和）には三十万個。



から硬石山を望む

石材店も百軒を超え、石山地区は活気に湧いた時代でした。切り出しは全て手作業で、約三百人の石工たちは、何種類もの道具を使い様々な大きさの石材を仕上げました。機械を使用するようになったのは昭和三十年代半ばのことでした。

人気の高い軟石でしたが、大正時代にコンクリートが登場すると、用途の幅広さと低価格性などから徐々に需要が減り、戦後にはコンクリートが大勢を占めるようになりました。

現在、札幌軟石を採石するのは辻石材工業株式会社のみとなり、採石量は年間約六百五十トンです。墓石としての需要が多かった時期もありましたが、近年は、その風合いを生かした床材や外壁材、造園用石材など、さまざまな用途に合わせて加工し提供しています。

村井均主任は「機械化が進んだとはいえ、割り出しなどは今でも手作業です。経験を要する仕事なので後継者不足が心配ですが、このすばらしい石を後世に残し、これからもどんどん利用して欲しいと思います」と語りました。

● 軟石を使用した建造物



▲札幌市資料館（旧札幌控訴院）【(中)大通西13】



▲ぼすとかん（旧石山郵便局）【(南)石山2-3】